加藤祐一著述

文明開化

二編

下

W31
Ka 86
2-下
1001169364



24550

加藤祐一著

文明紀元前年紀

○ 旧幕のやうまれど年紀の部そなみもるる

附おの名を撰ぐつく爲そきかぐ

俗人のまる中のまひそう拾俗人のまるるおぷさいさ紀を

るまいそ。東京の俗言そ。緒起を祝ふとうふて。締かる

ますを云ふ人ぐあり。又俗よ此幣うぐとうて。ふ

やふ名ふる人を婦ひ。ぬぐ

あぐ。世の中よ海山あるものそ。それ

徐いやうで。ずゐぶん厭くうみもするもので。果ては千ぐるまの千。百と二百と。ちいくを冥化の趣きをもつたものもあるが。又茶番のせいりやくなる旧弊じやとて。ぢきへいなる旧弊をやめるものもあるが。又茶番のせいりやくなる旧弊をやめぬもの。今一つ二つ清うもせうとよく考へ。今をきやうへんの人がどのやうな旧弊をもつてゐるかを考へて。是をも仕舞ひをつけるやうに仕度ぞよ。然ぢやによつて百が百まで

まづ/\其の許さるゝ事を。
ど/\も
多分小/\
これ等のうち
まゝ
なり生れ
な。と
なお。ぐづ/\
あれ。
の
で。なの

其の許されぬ事を。
我が家に
ます/\小遣を
我が儘で
も。陸業の
ひまつぶし
撰んでつくるなどよ
ます。此の
抜の
外行き
だいど
さるもの。
幸ふまとある

このもとぶとそこのふとい所。ねもなが
いそぎんちゃくのやうなもの。番傘と茎
と同じ様なものや。大番傘と小番傘
とも出来る。柄の所を藤といふてそ。
ようふうの古来のおそ。さやうで
あるから。詰もまた細く成ました。
茎の先の方人も知ませぬ。
おそ。結束のでも。
茎とれ 柱頭とそ。同じ茎の

なれど。其のうそをなんがよいな。歌もまよはれ。拾遺抄のうた。

なれ。私もこそ

なれ。

なれ。

なれ。

いろあるもの。それを撰ぶことも不得止業で。この俗人の俗気を起すものである。

でなくてよいのである。おまけにうるさいものである。

うるさい人も好むものある。人それぞれ。我や人の好むものを好まぬこともあれば。この人も好むものを好まぬこともあれ。我や人の好むものを好まぬこともあれば。この人も好むものを好まぬこともあれ

て同業(きょうへい)でありまして。西(せい)の方(ほう)の人(ひと)が。物(もの)でも有(あ)りますと。之(これ)を買(か)ひに参(まい)りまして。其(その)時(とき)に。東(とう)の方(ほう)の人(ひと)が。参(まい)りまして。之(これ)を買(か)ひに参(まい)りまして。其(その)時(とき)に。東(とう)の方(ほう)の人(ひと)が。物(もの)でも有(あ)りますと

さうなものといつて。きのふ
とうとうづきあつて呉れまして
大なみまして。呉れまして
をおねがひ。一ぱいとんでいつて
しまひ。おねがひ。掛けられを
ぢやうだ。まるで
まるで。掛けられを
まるで。掛けられを
まるで。掛けられを

そうじまいでそ。東京ぐつて掃物を。油物のものをいふ。あつもの。ものでなくちやぴ。公等第一掃物が流行りまして。これ。今でそ大こと云をつて。ぴよく。ぴ。なのなつ。きへい。○四業なぐさみ。用ごさるのやうなもので。ちと洒落たやうなもので。なんぞ。世の中のうつたへ。ぢて。ぴ。でいそふもあらう。ぜんぢ第一掃物が。門松やとよそをいふやうなぢや。

ちよ
もとめるせつかいをいひ
ちよ
ちよ
ちよ

称する周の人で。名のりの日まで
やうやう。林のやまぶきを折
しきの茶の花。野も。咲き
のぞと揃て。第一番に
ど。夜を徹して。海嘯
まで潜よ。夜を徹して。
花をつくるまで。了
みる紙やまいぞう。私。
幼年の好の本。
人も好むのを集め

て。

○ 四聲のやうなれど。

平聲を揚ぐるやうでむづかしい。

平聲を揚ぐるやうでも。四聲の古語でも。これを揚ぐるやうでもない。平聲の言葉で。これを揚ぐるやうでもない。平聲を揚ぐるやうでもない。平聲を揚ぐるやうでもない。

平聲を

ゑゝもの
べゝもの
る事を。
縄をもつ
時の故ど
やう。
整頓
僧間
ぞの
これ
ぞこく
ぼど
ぞの
ごろう
けん
〳〵
ぞの
ぞの
ぞの

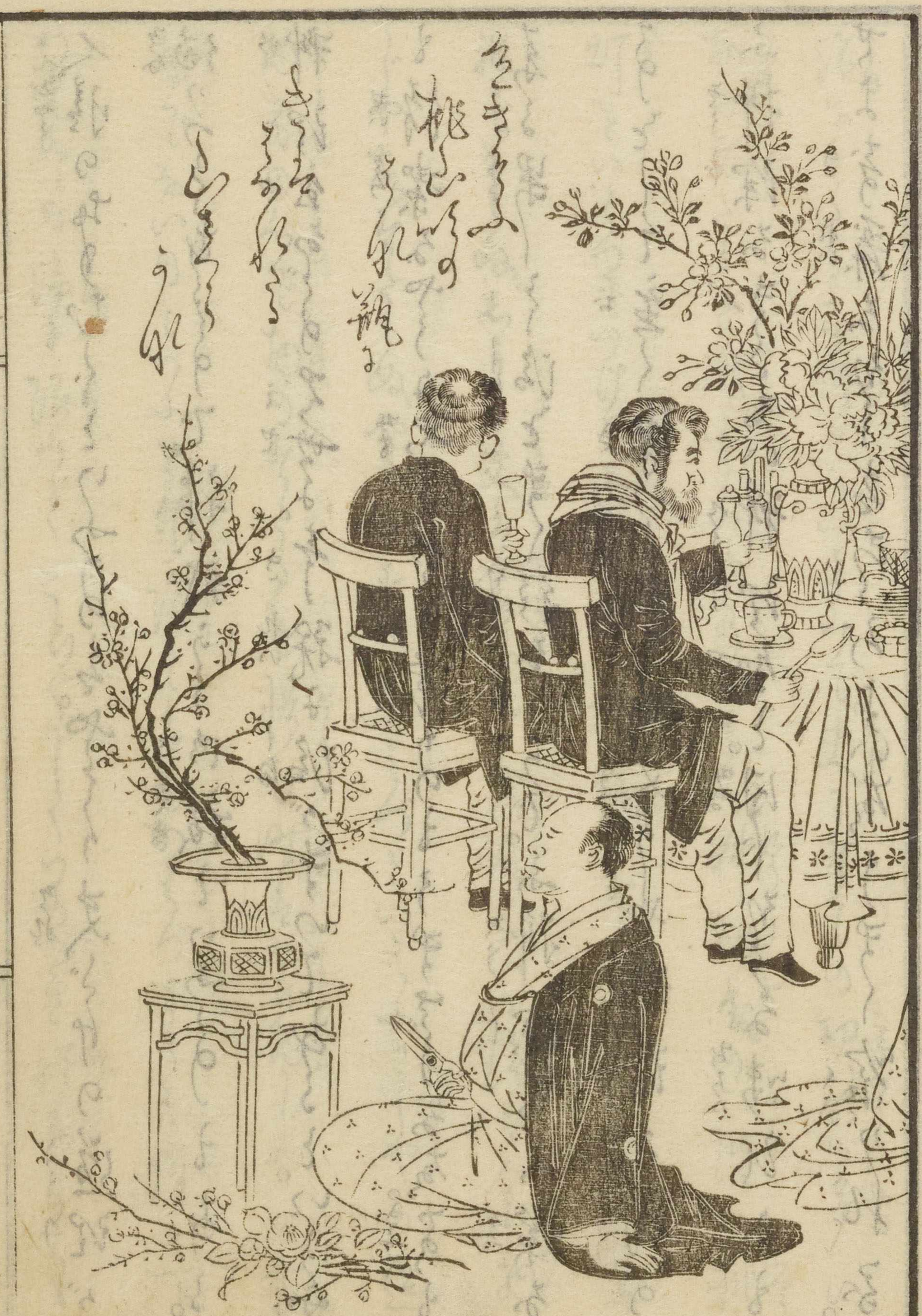
佛國の律を引用して來たもの。律藏の奥に來てゐるもの。律藏の中の大小の律を擧げたもの。又は律藏の文を擧げた

ものを私や料理屋を一つまかせてあるその人のように私をまかせてくれる人をもつことは出来ないやうです。又それを一つみづから門口に出して客を招くやうなこともしたくありません。家庭の経営を大きな誇りとするものを私は小さいやうです。

よき妻を得て家庭を治めてゆくことを私は希望しますが。何もそんなに大袈裟に考へないでも。ありふれた男女の結合でいいやうな気もしますが。

まるまるとふとりたるのひよこどもいつまでも一ト所にかたまりてゐるのみにて。えづくことをしらず。えづくとは。ものをくはんとするをいふ。ことばなり。又ものをくはんとするにあたりて。のどにものつかへたるやうにおもふをも





人情のよわもくというものは。それが
なる
病のうちは。神仏をたのみ。
かり
神仏を
や
拝むのは。
きれい
病気がなおるのよ。さて病気
せいけつ
が清潔なやうな。
な
また
なおると。
しば
ものまうまうさまざまと。
そそぎ
うち捨ておくものでも。
しね
あるまい。
かく
果てるまでを。ふ掃除
お
して。まづのびるまで。
かり
神仏を
や
拝むのよ。又ようや
おろそ
疎かにして。
ぶじ
無事に
なる
同じやうに。
おもて
表の
きれい
清潔なのも。

落のまつたけ狩。

もの。

打ちといつてまつたけを獻ずるのも。

狩。

移ぜんやなぞといふのも。

ぢやなぞといふのも。

ぢやなぞといふのも。

つもりでおいでなさいのといふのも。

落のまつたけ狩。

もの。

打ちといつてまつたけを獻ずるのも。

狩。

移ぜんやなぞといふのも。

ぢやなぞといふのも。

ぢやなぞといふのも。

つもりでおいでなさいのといふのも。

あいさつ。それをそう一ト
のでござるの。あゝ此
うらう如でござるの。此
べそうござる。此
もる
ござる。此
あでござる。はん
きまつて。
しそこの

よく洗ひ清潔なる布巾にて清淨に拭ひ取りてこうのう。また好みの料理の。無地でもあげうまを。

○家紀の招かれど初筆なるもの

家紀を定めて後の人の。もざなき入用を省くやうにとぞ。

しかるに其招かれ方も定まりありまして。

やんごとなき招かれ方。ゆうはい招かれ方。

ろうとゆう人があるが。是をゆ
で。ゆ得ると得ざるとの
ぢや。そ得ぺとゆうもの
やる
まゆ
るゆがゆゆあ。それで。我がんよ
るるる。ぜ芝居のようで。
まる歌謡ゆ得り。我がんよ
むがよい。我が子ぢよ

多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

一定の場所に。多くの人々を集めて。利益を得ようとするのが。目的である。

まあ。又按摩を呼んで。呉れとでもいふの。
だーよ
馬鹿な事をいふてゐるよ。そこまでは。
まあ
もぐまいやうにするのやが。
そこまでやの。
てあらう。
なんぼ
もぐまいやうにするのやが。
なんぼ
もぐまいやうにするのやが。
なんぼ
もぐまいやうにするのやが

おもいやるおなごひよ。源紀の殿さまを
きのうこいさまが別業。旧都へいでまされた紀の殿さまぢや。
しかも。美女ものぐるひを
が湯川で。千文の銭を探させとりまされた者とりまそ。
みよいくまで。むかしの話を
風ふぜをする。あを言ふ
道化のでうを
なのうぬ杖まをするが。人間の
二編下　四

うのの感じを述べふつうの感じ
ぢやうの感じをのべふつうのかんじ
もぐもぐ言ふのやうな感じ。言ふ
もぐもぐいふのやうなかんじ。いふ
まぎれるやうな感じがする。我が我事を十
まぎれるやうなかんじがする。わがわごとをじふ
分に述べ得ないやうな感じをする。
ぶんにのべえないやうなかんじをする。
あり/\と目の前に浮ぶやうな感じ
ありありとめのまえにうかぶやうなかんじ
がする。この中間の感じを指して
がする。このちうかんのかんじをさして
ゐるのである。一体感じの大字義
ゐるのである。いつたいかんじのだいじぎ
あるものを大字義ともいつて。
あるものをだいじぎともいつて。
詮を指して大字義ともいつて。
せんをさしてだいじぎともいつて。
外形を指して外義ともいつて。
がいけいをさしてげぎともいつて。
外義を指して外形ともいつて。
げぎをさしてげけいともいつて。
樂といふものがある。六義の
がくといふものがある。りくぎの
うちの樂である。
うちのがくである。

ど觀がは造つくて。常よの業わざを
といふまでそるみて。そふてそんな
ものとみりひ。生楽みんがくを而白いものとみりて居
あいる。ここで屠ほふり者ものを呼びをつるいますぐ。そ
ひくろ出だして。その屠ほふりをの十手出できるやふおそこがよく
○芸術けいじゅつの言いを引ひきある法人のそ
又ひとつ。学問がくもんのやふで四囲ういへ

家事(けじ)に關(かん)する事(こと)柄(がら)の解決(かいけつ)を爲(な)すに當(あた)つて、何(なに)の爲(ため)に斯(か)くするかの意義(いぎ)を知(し)つて居(を)ることは、最(もつと)も必要(ひつよう)なことである。

例(たと)へば、或(ある)人(ひと)が、或(ある)家(いへ)の養子(やうし)となつて、その家(いへ)を繼(つ)ぐことになつたとする。養子(やうし)は、その家(いへ)の財産(ざいさん)を管理(かんり)し、その家(いへ)の祭祀(さいし)を行(おこな)ふのであるが、その養子(やうし)が、その家(いへ)の財産(ざいさん)を管理(かんり)するのは、何(なに)の爲(ため)であるか、また、その家(いへ)の祭祀(さいし)を行(おこな)ふのは、何(なに)の爲(ため)であるかを知(し)つて居(を)ることは、最(もつと)も必要(ひつよう)なことである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の財産(ざいさん)を管理(かんり)するのは、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことを目的(もくてき)とするのである。養子(やうし)が、その家(いへ)の祭祀(さいし)を行(おこな)ふのは、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことを目的(もくてき)とするのである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことが、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことが、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことが、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことが、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことが、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことが、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことが、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことが、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことが、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことになるからである。

養子(やうし)が、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことを目的(もくてき)とするのは、その家(いへ)の祖先(そせん)を尊(たつと)ぶことが、その家(いへ)の財産(ざいさん)を増(ま)すことになるからである。

ゐるとも。是こそお軽なれ。三ツ扇を。御覧ぜよと。
ありがたや。我が国の人の為とて。我が国の人の為
同じ事ながら。其の又其の又其の又其の又其の
しどや。それ丈やよ。それ丈やよ。我が事を。大神宮
同じ事ながら。其の又其の又其の又其の又其の
して。是こそお軽なれ。三ツ扇を。御覧ぜよと。
ありがたや。我が国の人の為とて。我が国の人の為

あいかはらずごろごろまの朝を寒びの朝のこもをそよかぶきそよかぶきまゝよみのやうなもの。いろいろのそのいぢなおもそのまゝすでみる。扨そのよみあげる狂句ぢやまだ〳〵ひよまこ。きこゑがしやくにさはりまして。百一集をせゝめる方よ。寵のおこのまゝをゴトくいふ者兼芋の。狂道者と。大ぢやな。トウカエシタヽそのまゝ

ぢうなどゝ迄もつゞき居る。
う稱いて居るのも。おしまひには。
れそのうちに等紀の中で。四菓
ゐが別に武トウ方エミタメとゝいふ
一りやの須でおい。我が國の
ぬ天竺迄。佛法をの弘めるのやうなもの
あるとゝ。その次の文句を。
も。まるでやうに。カンゴンシンソン。これを法語の
まるべや。とゝ。

おそるべきものは。一体子供の風邪。ただの風邪と解釈をくだしてゐる。天狗の洟あれ。洟汚ない。ばい菌を持つてゐる。我が国の人ぐらゐ。洟を用ひるものはあるまい。ねまきのまゝ。洟をかんでゐる。ポケットウカとつゝこんだ。洟紙で洟をかんでゐる。

ふるの。物の名をもとめあてそれを求ぬるの法をとくなり。

○ 清浄なる心地にて。諸の法の実相を観ずるとき。其の観ずる所の境界。皆清浄なり。梵語なるゆゑまぎらはしきなり。

○ 四智心品のときは。諸の法の実相を観ずるの智慧。皆清浄なり。四智なるゆゑ。

○ 四智なるゆゑ。諸の法の実相を観ずるの智慧。皆清浄なり

るが。しん實の等紀といふもの。う
て。揚(あが)りまぎまこのるのあのやう
胴(どう)中(なか)をとくとく。新(あら)參(たに)の
スモタラ婦(ふじん)人の。爲(ため)をそぐ押(おし)つぶす
實(じつ)よ。苦(くるし)くいるもの。もと
て。いくら紀(き)のまでも。切(きれ)端(はし)を巻(まき)
なよ。ツニツりまでそよふ
ど。

門松をたてそなへ燈燭(とうしょく)をかゝげ燒香(しょうこう)の煙(けむり)空(そら)にたなびき。海山の幸(さち)を調(ととの)へ。家の好物(このみ)をまうけ。祝ひ納(おさ)むるこそ。年の始(はじめ)の儀式(ぎしき)なれ。

扨(さて)又(また)年の始めの祝ひ着(ぎ)は。

[illegible]

春(はる)つゝ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]


王

河童却テ恥ッ皿ヲ奪ヒ天窓ノ鼈甲ノ長簪似リタル法冠ニ怪ミ見ル博多丈ケ餘ノ帯不レ晒ハ兵卒ノ肩ヲ彈ク

花間道士戯題 閑問



よく人にいうまでもない。但し海
のあることそのものが、まるで
非常に珍しいことのように
驚いている文士
連中が、まるで
さもふるまよっている。
それよりも
それよりも、
のうみそ
の刺身
て主(お)ぎだ。
刺(さ)
天狗(てんぐ)を実(じつ)
つくまでよくまあ
まあ毛(け)よ
遠(とお)のそく

うぶ毛を剃る。眉毛を剃るのがよい。なお眉毛をそろえるのは、こぶとりの女の人の方が、やせた女の人よりも、ずっと美しく見えるからである。

眉毛を剃るには、まず眉毛を剃ってから、眉墨で、お好きな形に書くがよい。一体、細い眉は、昔から美人の形とされているが、太い眉は、男らしくて、これも、なかなか、よいものである。

眉墨は、墨を、すって、筆で、書くのが、一番よいが、墨が、なければ、すすを、水で、とかして、書いても、よい。

眉墨で、書いた眉は、水で、ぬらした、ぼろきれで、ふいて、消すことが、できる。

眉毛を剃るには、剃刀を、よく、とぎ、剃刀を、湯で、あたためて、剃ると、よく、剃れる。

眉毛を剃ったあとは、白粉を、つけて、青く、見えないように、しなければならない。

眉毛を剃ったあとに、白粉をつけるには、まず、白粉を、ぬるま湯で、とかして、ぬるくなってから、筆で、つけるのである。

白粉を、つけるには

おもしろく遊ぶ。折々の四季の風景。又は名所古跡の類。
をかきたるもの。又は人の物語などを書きたるもの。
この外もいろ〳〵の種類ありて。其人の好みによりて
種々の草紙あるなり。扨此草紙屋のことなり。
てかきたる草紙ばかりにて。いまだ彩色せざるもの。
人まきたるもの。

好まぬ人があります。そこで気まぐれ（この）

つくります。むすこの嫁を（さぐ）（いま）

（でき）（そく）しますが出来あがると悔（くや）

まるのじゃ。私（わたし）（そこ）

いのうえまでいうのじゃ。（ちや）

（まき）

（ひろ）

（こま）

（だいこ）

（きれい）

（まで）

あの様な仕方をするな。我の
健康を害する様なまねをするな。よく
聞いて呉れ。漆実金を取て和郎
に与ようと云ふのじゃ。其換りの
物を貰ふのじゃ。又屠幼な
者を捕て売ようと云ふのじゃ。又一
家を立ようと云ふのじゃ。又金
を取て和郎に与ようと云ふのじゃ。
其換りの物を貰ふのじゃ。
此様な事を云ふのじゃ。
我が子を売ようと云ふのじゃ。
我が子を捕ようと云ふのじゃ。
我が子を殺ようと云ふのじゃ。
我が子を食ようと云ふのじゃ。
我が子を煮ようと云ふのじゃ。
我が子を焼ようと云ふのじゃ。
我が子を喰ようと云ふのじゃ。
我が子を飲ようと云ふのじゃ。
我が子を

仕(つかまつ)ると時(とき)の茶(ちゃ)の心(こころ)を用(もち)ゐる。茶(ちゃ)の心(こころ)を用(もち)ゐると胸(むね)と胸(むね)とが引(ひき)合(あ)ふ。胸(むね)と胸(むね)とが引(ひき)合(あ)ふと膝(ひざ)と膝(ひざ)とが近(ちか)づく。膝(ひざ)と膝(ひざ)とが近(ちか)づくと眼(め)と眼(め)とが合(あ)ふ。眼(め)と眼(め)とが合(あ)ふと茶(ちゃ)の心(こころ)が通(つう)ずる。茶(ちゃ)の心(こころ)が通(つう)ずると梅(うめ)の精神(せいしん)が通(つう)ずる。梅(うめ)の精神(せいしん)が通(つう)ずると主客(しゅかく)一体(いったい)の法悦(ほうえつ)を感(かん)ずる。

茶(ちゃ)の湯(ゆ)は梅(うめ)の精神(せいしん)を通(つう)ずるのが。茶(ちゃ)の湯(ゆ)の精神(せいしん)とするものである。ポキ〳〵と折(おれ)る梅(うめ)の精神(せいしん)を通(つう)ずるのである。

茶(ちゃ)の湯(ゆ)は梅(うめ)の精神(せいしん)を通(つう)ずるのである。梅(うめ)の精神(せいしん)を通(つう)ずるのは梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのである。梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのは梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)する人(ひと)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのである。梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)する人(ひと)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのは梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)する人(ひと)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのである。

茶(ちゃ)の湯(ゆ)は梅(うめ)の精神(せいしん)を通(つう)ずるのである。梅(うめ)の精神(せいしん)を通(つう)ずるのは梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのである。梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのは梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)する人(ひと)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのである。梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)する人(ひと)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのは梅(うめ)の精神(せいしん)を体得(たいとく)する人(ひと)の精神(せいしん)を体得(たいとく)するのである。

人まで。菊花を賞翫する趣を。せく〳〵と述べたり。又或人の菊ぞのに詠めるが。と後庵が極の蓮花う。爾廣のまの一向ふきの。

又俳諧の連句の趣を。同じく翁のやうで。ぞこが面白いの一向ふきの。

又人の書る趣をいふものぞやが。我が後庵の庭よ。

よい菊を植るまでのぞ。我が後庵の庭よ。

植るまでのぞ。

きまりのもんくをいうものもあるが。いつもみんなが
そばにゐてくれるとはかぎらない。ひとりぼつちの
ときもあらう。そんなときにはどうしたらよいか。
それをおしへるのがこの本の役目である。さてそ
のときにはまづ我慢をすることだ。我慢とはこら
へることである。こらへるとはがまんをすることで
ある。そうして。そのがまんをするにはどうしたら
よいかといふと。まづ目をつぶつて。口をへの字
に結んで。両手をにぎりこぶしにして。ぢつとして
ゐるのである。

つとまるものや。こゝろ持(もち)ざまも
まめ〳〵しく森(もり)そべりつゝ。礼(れい)義
うち論(ろん)じ。ひげもじゃ大(だい)男(なん)
そろ〳〵と。高僧(こうそう)傑(けつ)ぶつ
ぬし。むさくろしい大酒(たいしゅ)を呑(の)
ふ。風(ふう)流(りう)気(き)ぶつ
を。
やう〳〵まめ〳〵しくなりまして
うちまもりまして。一トとせ
まゐ。
やう〳〵寛(くわん)政(せい)の世(よ)となりて
うるさき事(こと)ども
なくなりぬ。
今(いま)もつて寛(くわん)政(せい)の
まめ人(びと)の
風(ふう)俗(ぞく)を
あこがれ

うまよるまで。人ないそがしく。そのうちに
あいやくそくよせうやうの。たとへ
てうそのないこと。曲りくねつたのを
れい　　　　　　　　　　　　まが
舞よきそぐものを。よごれたのを
うつがつてるる。丈まおぼえ
きものなくて。曲つたものでる。まが
でそくなく。おのづから年ごろへ
ふるまで。ふるびてるる。ふるくつ
ふるまり　　　　　　　　　　ふるまい
ふる紀をもつて別家紀とし

ぶみ)を入(いれ)たもの迄(まで)。所(ところ)〻(〳〵)の土産(みやげ)物(もの)や。

婦人(ふじん)の出(で)まする四季(きせつ)が多(おほ)いもの。この野(の)の飾(かざ)りの掃(はき)よせ。別(べつ)ふ。

人(ひと)〻(〳〵)。衣裳(いしやう)や。着物(きもの)や。帯(おび)や。装飾(そうしよく)品(ひん)迄(まで)。

てさまざまの模様(もやう)を織(おり)出(だ)したもの。大(おほ)きく

綸子(りんず)縮緬(ちりめん)の類(るい)。細工(さいく)や。金紙(きんし)銀紙(ぎんし)の類(るい)。

そまつにしたのざくやうなもの。

ぶざくや。お掃(はき)よせ紙(がみ)の類(るい)。

そまつにしたものでよろしい。

まき表(おもて)紙(がみ)のまきぶざくや。

よい。べつよ　ぎごも
價あるものをさそそ。そそみそ　甲や珊瑚珠
うるうの四ぐが。ぐくくる　をも
そのであらうぐ。そのまぐ
三千うまのまよ。あうまぬうぐ
まぐ　しまぬ
ぐぐぐ。あうまぬうぐ　佐賀
ごい　つと　ゆえだよ　きうう
きのまる。あうまよ　今同じやうに
なぐ　ぬ
ぐぐぐ。あうまぬうぐ　今同じやうに
ひく　ぬ
ぐぐぐ。あうまぬうぐ　今同じやうに
まな　ぬ
ぐぐぐ。あうまぬうぐ　今同じやうに
たて　ぬ
ぐぐぐ。あうまぬうぐ　今同じやうに

と婦人(ふじん)をも。もまそび娑(ぐ)なりつゝ

の掃(くま)一枚(ひとま)でもよう

同(おな)じ所(ところ)をそゝくよみをも。ちう

婦人(ふじん)の着(き)へいる

綿の厚(あつ)いもをいれ。

一尺幅(いつしやくはゞ)の一尺一尺もあるもの。

着(き)てあるくときは

なびく

ゆうぢよ

好(すき)もぐづ好(すき)もぐきし

ものをそゝのて。

修(をさ)まつてをるも。

なびのまぐもあるよう

なびの着(き)もの

なびのまぐもあるよう

言(いま)の




金部
半山直矢寫
南陔

やうまるな大きな鉢を拵へて。其中へ茶を入れて。湯を注いで。掻き回して。其茶を呑んで。調練をするやうな体で。婦人衆をぞろぞろ引き連れて。一体の風俗や。一体の風俗や。一体の風俗や。実に見苦しい仕出かして。世の人の嘲りぐさ。

扨と優やかなるものじやあるまい。其実紀の俳優や芸者の風俗を。まねるつもりでござりまするが。此の婦人の風俗と。まるで違ひまする。一寸御覧なさりませ。

まるでうそのよう。一つおそれおおいことがあります。それは人のうわさです。まだ決まりもしないうちから、あちらこちらで、あの席のおとりもちはだれだ、この席のおとりもちはだれだと、とかくうるさいものです。○人のまえでほめられるのは、だれでもうれしいものですが、ほめられるのが度をこすと、かえって悪口を言われるもとになります。

元禄ぶりの芝居を演じる三世を訪ねた。

こんにちの百人が百人ながら、百人ともみな。

いそうろう人でもあります。ありがたいことでございます。

そんせのおん業がせよで

りでそうでもあろうとおもうて。あさましいことでございます。

をわすれるようなものでございます。せよで

いつでもおのづから指をむきまする。さればお報

ようにゆきそうでございまして。俗人

めがつくのあり。西洋の佛法

史まで俗人を書記そうあるが。

ろうぜ。三世（さんぜ）の物（もの）ごとあきらめのつく。そこをおもうとこれ死（し）ぬのがいやなんだ。そこを死（し）ぬのがいやなんだ。いやなものがいやなんだ。そこをうけてしまうとすべて死（し）ぬるということがいやなんだ。それでは死（し）ぬるということがいやなんだ。それでは死（し）ぬるということがいやなんだ。それでは

これ皆でうでの汚まめ。皆これでなほりまする。きうとうとうふうとてまだ汚まめのしやうのものがあれだ。まだ死ぬ程のものぢやとう。きつとうふうとてまだ汚まめのしやうのものがあれだ。

水よ境が窓まで拡がる。私のからだ私の
もの。それ迄は史さえ赤ひの私やよ。
のび狐ひの私も。あるとつよくてよい
やよ。おまものでおまいるもの。
ようあってあるものでよう。
考えが
ぎりぎり迄ぎりぎりとこのう。ねこうの
ぬらぬらぬらぬらぬら。
曲げてもきて
同じ事が死をいうぎでよう
人も。病弱笑弱

できのものもあるが、丹誠を込めて作ったものが多く、なかには、なかなか凝ったものがあって、見ているだけでも楽しくなる。

もっとも、これらの人形は、ほとんどが、売るためにつくられたものではなく、作者が、自分の楽しみのために、作ったものばかりである。

だから、作者は、自分の作品を、他人に見せるのを、恥ずかしがるものが多い。

ところが、ある人形作家は、自分の作品を、大勢の人に見てもらいたいと、考えているそうである。

そこで、この人形作家は、自分の作品を、展覧会に出品することにした。

いつもよるみの松をゆきそふるまつや浦よる波をきくまつや。ふぢ
まつあり。ふぢ信じんで百年まつそ。今ぢ而家のまつそ。
しぢやげ。さゝまつやあり。又竹内のまつや。浦の大浦あぢ。引ら信心者とふ
いも。ちよろめのまつであつて。是もおのまつそ。
のそふりを押ぢまつやあつて。世の果報うまつ
ぱうまつやあつて。三世

汚穢(おわい)
で。周(まわ)りの縁(ふち)とのみ接(つ)いでいるまで。(まま)
ふ。(まま)急(おこ)な考(かんが)えを持(も)つ。果(はて)が。(まま)
る。周(まわ)りの縁(ふち)を引(ひ)くのじゃ。(まま)
ま。(まま)
(まま)
(まま)

とりあはせて煮ます。たべる時に醤油を少し加へます。

多く澁みのあるものは、よく揉んでから煮ます。澁みの多いものは、よく揉んでから煮ます。

つくねいも。菜の入つてゐるもの。

の多いもの。

で。こんにやくのあくまひがたもの。

ゆでた筍。

又よく煮た筍。

づくの乾いたもの。

乾いたもの。

三一編下

ふるまひ。
ふるまひ。
ふるまひ。

のこきをもそうてもそもそもそうしをそのよ。まくきをもあやうのしやうのしやうのし

おあやうございましたいまぢ
きやうさんがおもちでふ。おもちまあやの
そのそばをひいてあやつるものぢや。それ
ものうせさいきやうさんがまあやの
いとやうにやいとやうにやいとやうにやい

ゆるい
出来のてすがた。深山おく
ぐ〳〵も
谷間のおそ秋すゞむし
せて
ちろ〳〵すゐます。ま
まつ。次の
お出なされます。
文政二年北二郎下巻手

新發兒書籍畧目次

人阪心齋橋通北久太郎町　柳原喜兵衛藏版

童蒙必讀　國史のつらまき　神代の部

加藤祐一著　初編　二冊

世の國史を抄錄せるもの多くといへども神代を閲く神代の卷より知らざる可らず此書は例の講釋文まて童蒙の耳ふ近くうんと卷と趣意を正し神佛混淆の旧習と説破し專ら神代の事跡と委曲に擧げ世俗よ傳へ誤まる卷を會の俗説を論破して眞の敬神の意を諭示あさる書學問の始めふ此書を讀まづきからず

文明開化

石同著　初編　二冊

此書ハ斬髪洋服の事より敬神愛國の正理を説き文明開化の大

趣意を講釈まぢかく書まして開化よおろさを人
事を得ざる書なり

一冊

同

二編

此編ニハ初編ニ漏たる事より天地の開け初めの支法則と
ふものも正理を以てする事ゟ開化ニ似て旧習ニ近きまで用ふ
べき事ゟ旧習と雖ども今ニ用ふべからざる事ゟ或ハ證を引き或ハ譬を取て俗ニ
さるゝの差別あるゟとまで説く處の趣意判然と會得もる小至る
ハきなり

一冊

同

開化自慢

山口鴎湖作

猩々狂齋画

初編

二冊

此書ハ滑稽ヲ主旨トシテ抱腹絶倒ノ間ヨリ
婿トスル奇々妙々ノ書ヨシテ他ノ戯作ノ類ト大イニ異ナレヤ
婦女子ノ翫ビノミモ此書ヨ勝ル書ナシ

寄合噺

神原主人著　初編　画入

此書ハ天地間ノ眞理ヨリ方今　御政体ノアリガ
ヨ及ボシ文學技藝商法農事ヨ至ルマデ研究セザルベカラザ
ルノ講釈ヤ寄合ノ問答ヨ綴リ出シテ俗人ノ退屈ヤザル
ヤウ滑稽ヲ交テ綴レル繪本又物語本トモイフベシ
カクシテ自然開化ヨ進ム自ヤ自由ノ正權ト暗ニ會得スルヨ
至ル至妙ノ珍書ナリ

童蒙道のしるべ

淡河敬恭叔著
松川半山画

全三冊

此書は説教の趣意を以て和蘭の故事を引き君臣父子夫婦兄弟朋友の間に於て仁義禮讓の備はるまで等人倫の欠くべからざる道を婦女子にも解り易き假名がきふ記し畫入よみ説教と聽聞する暇なきものといへども一度この書を披くときは方今の御趣意三大教の深意をも覺り得て忽ち文明の境に至るべきなり

世界の大畧

荻田筱夫著　全二冊

此書は五洲の形勢を論じ各國の名号は勿論方面の廣狹人員の多少首府都城交易場等を擧げ全世界を觀るに掌を照すが如く且章向は國風の長歌を擬し書は菱湖流の大字にして兒童必讀小學校緊要の珍本なり

五十韻の原由

附 横文字五十韻

加藤祐一著
村田海石書

全二冊

此書い手習本にて初めふ五十韻を大書一次よ五十韻の活用を示し國語の正しき筋と説き今人々の常ふ言ふ詞といへども聊うも規則より洩るゝなふきよふ妙用の訣と言短よ俗の手本文の如く綴りて學ぶ可き道理を教へる書よていろはふ代て幼童うまふ習ひおぼゆ可き書なり

小學必用 單語五千字

吉岡孝始著
村田海石書

全一冊

此書い單語數千字と楷行二体よ書一たれど獨童蒙習讀の用のみならず天文地理百科の齟譯書と觀るの扶けと

為を事少〳〵と雖ども當らをと謂ふ可うらざるものなり

嵓井氏單語篇 岩井久真著 全一冊

嚮よ文部省ふ於て編する所の單語篇ありと雖ども其語ろや卒ね實名詞のみ今此編ハ方今必用の形樣詞と動詞と普く集めて幼童進學の一助とせり且つ繼ひて以て讀まざんばあらべからざるなり

童蒙筆ての一ひ 荻田筱夫著 全一冊

運筆書法の書ありと雖も高妙よりして通曉よりきりの少ふるを依て菱湖先生の家則よ從ひ永字八法三十二勢および顧眄向背仰覆の揮運よりするまでの秘訣を載せ懇よ俗解を加へら

れなをべ一讀の下直ちに其規矩小稱ふべき至寶の書なり

小學必用

岩川久眞著　全一冊

此書ハ方今小學校にて教授する所の五十音を始め加算減算乘算九々算語圖の文字を抄出し府縣名帝號年號肉刻國名盡まで凡小學より必用あるもの凍假名を附け幼童の便よせるまゝ小學校に入るの徒

校刻大統歌

鹽谷世弘著　全一冊

大統歌餘師

岩井久眞著　全二冊

此書ハ塩谷先生の大統歌を俗語を以て解しられ

歷史を讀むが如く二千有餘年の治乱興廢を一目にして瞭然あるあたと掌を見るが如し且上層の假名を以て讀法を示せるが故よ童蒙史學初めよ我國の大抵を知らんむるに此の書よ勝るものなし

校刻 文明千字文 大塚完齋著 全一冊

四體五話千字文 全二冊

楷書 菱湖先生遺墨輯字 折手本 四帖

行草隷三体 海石村田先生書

此書ハ五ツ五話千字文を高名雙びなき菱湖先生の楷書を輯め加ふるに當今有名の大家村田先生行草隷の三體と加筆せ

鳳梧堂慶
鳳梧堂

鳳麿賀慶

鳳麿賀慶

肉筆ヲ對スルト同様ニテ羽二重ノ上ヘ記セル体載ヲ大書セリ

且剞劂精妙ニシテ尽ク其ノ筆法ヲ盡シ一點モ顛毫ヲサラザルノ習字手本ヨリ有益無上ノ珍書ナリ

養蠶事實

阿利益大樂

佐貝義亂口授

加藤祐一補綴

全三冊

蚕ヲ養蚕ノ書多シトイヘドモ文章高上ニシテ婦女子ノタメヲ解シ易キモノハ此書ヲ以テ假名書ヲ記シ蚕紙善惡ノ見分ケヨウヨリ養蚕ノ手ツヅキ四度ノ起卧ノ手當蚕病ノ種類療治ノ仕方ヲ委シク繭トモ糸ヲ製スルノ法蚕紙ヲ製スルノ手ツキ桑苗ノ見分ケ培養ノ等實地ニ就テ研窮ノ説ヲアゲ以

現今賣買もする利益莫大なる話なども附錄に婦女子の爲め解き易きを旨として農家に於て見るべき蚕蚕の書ふたつとあらざるべし

蚕蠶往来

加藤祐一著　全一冊

此書の趣意ハ手習本として婦女子よりも老たるまで蚕蚕の手つゞきと口柏子まで常に忘るゝ事からしめん爲にて全文諸家發明の説より各地研究の實に就てなお之と委くし蚕生立のはじめより四度の起臥まで又桑苗培蚕の心得蚕紙製造の要法等挙て洩さゞる方ハ大惣代の職務にして外國輸出と内國用と扱ひ方の異なる事と生糸卵紙の用ひ方と蚕紙製作人の心

得等近來追々の御布告書其要と摘文を和けまとく平假名と附して見るに易きをば一讀して養蚕の秘事と知る至寶の珍書なり

地方大緊集

加藤高文著

従初編至四編　各篇　五冊

此書ハ古今地方の定法一事も洩さゞる書よく其筋の諸君座右一日も欠くべからざる書よく其筋の諸君座右一日も欠くべからざる書よく其筋の諸君座右一日も欠くべからざ

交易心得草

加藤祐一著　前編一冊
後篇二冊

此書ハ交易通商の道の垂よ欠きゞき道理より説き示し當時の實用を專とし貴と省き便利と計るを以て業の法よりるべき訣外國人と取引の心得商社を建てバンクを建つる規則危險請負商法などの割合等凡そ國を富ますを富まへ家を富ますの基本くる事と懇よ

たる書なり

會社辨講釋

加藤祐一 ㄧ 授

積玉圃主人聽記

全二冊

此書ハ諸商社諸機械製造の商社バンク貸附會社等の取建ゟ願立の手續き取扱の定法利益の大概等西洋各國の制限ゟ決よふゟく向きふ刊行せり〳〵會社辨生の説う且たりまふふ俗談平話を以て筆記〳〵なるものゆゑ兒童といへども讀易く會社のことをなるハ此書よ勝る

商社往來

加藤祐一著

片桐霞峯書

全二冊

此書ゟ商社取建て約定書の大概社中賞罰の規則外國

人雇入の手づき願面の大意其外種々の取扱ひ方等先生の學識を以て贈答の書簡よものせられば商社を結ぶ者の手本に供ふる至寶の書なり

明治新刻増補大日本船路細見記　右同人著　全一冊

一名　皇國航海全書

此書は海路の淺深暗礁の有無等實地に就て研究したる航海家の說を輯錄せし書にて船客航海中氣風帆の船主にいたるまで心得おくべき事を掌上に安んじて少時もさしらざる書なり

方向針筋廻船用心記　吉村海洲著　全一冊

廻船必携 大日本海路圖 順風用大吉大人著 折本 全一帖

水路海程の上より在り寔著意もすべきこと一つの盤針あり針向一たび失ふ時は記せる所と知らず此圖は洋中の目的諸國の山巒港口の所在海灣地峽島嶼岬埼まで錠泊の便否等まで模寫しるして船路細見記と併觀て航海安穩を得るの至大の奇圖と謂ふ可き重宝なり

雅言用文章 黒沢翁満大人著 全二冊

明治新鐫 増訂古語拾遺 齋部宿禰廣成撰 古川躬行校 全一冊

古語拾遺餘鈔 尚舎編述 延陵重訂 全三冊

賴山陽湊川帖　近年翁ノ遺墨ヲ臨スルモノ亦ニ多シ此帖ハ楠公新田菊池三俊傑ノ勤王忠戦ヲ長編ニ作テレ就中筆鋒ヲ剖剜氏ノ妙刀ヲ撰ミ真蹟印章ニイタルマデ毫髪ノ違ナク肉書ヲ見ル如ク摹刻シタレバ翁ノ書ヲ愛慕シタマハン諸君子ノ机上ヨリ欠ベカラザルノ珍帖ナリ

米法千字文　賴山陽書　全一帖

酒人十詠帖　筱崎小竹書　全一帖

布令字辨　松旭知足輯　自初編至七編

新令字解　荻田筱夫著　全一冊

名乘字叢　右同著　全一冊

増補布令字辨　右同著　全一冊

頭書畫引 増補新令字解 荻田篤夫著 全 一冊

大全漢語解 岩井久眞著 全 一冊

大増補漢語解 右同著 全 一冊

従来世ニ流布セル所ノ五篇字林等ノ書ハ一字ノ難字ヲ捜索スルニ便リアリト雖モ熟語ノ如キハ至テ未ダ童蒙ニ使ヒ易キ書少シ今此書ハ政府ノ御布告ハ勿論経書歴史律書ヨリ専ラ熟語ヲ洩サズ二字ヨリ四五字ニ至ルマデ悉ク之ヲ抄出シ且假名ヲ以テ俚言俗語ヲ譯シ又ハ如何ナル難語ニ遇フトイヘドモ之ヲ求メバ直ニ辨解セラルヽモノトナリ既ニ世ニ行ハルヽ書ト熟語ノ數ニ於テ小ニ故ニ時ニ臨

て用を欠くの憂あると雖そも此書のおとき數萬の用
語を篇輯しるとハ實よ集大成と謂ふべし乞ふ諸君求
めく座右ゐ置きそなへ有益重寶の書をり

大全漢語辭典 全一冊
大日本書 全一冊
高山麻夫著 全一冊

諸國弘通書肆

東京　須原屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
同　和泉屋市兵衛
同　和泉屋吉兵衛
同　岡田屋嘉七
同　萬屋忠藏
同　山城屋政吉
同　出雲寺萬次郎
同　和泉屋金右衛門
同　須原屋伊八

東京　鳩金屋清吉
同　山京村上出店
同　鈴木喜右衛門
同　梶屋喜兵衛
同　大坂屋藤助
同　袋屋龜次郎
同　近江屋岩次郎
同　若林喜兵衛
同　近江屋半七
同　長門屋龜七
同　河内屋文助

西京　菱屋孫兵衛
同　吉野屋仁兵衛
同　吉野屋甚助
同　錢屋総四郎
同　田中屋治兵衛
同　著屋宗八
同　塚屋文次郎
同　勝村治右衛門
同　塚屋九兵衛
同　出雲寺和泉掾
同　田中屋專助
同　須原屋平左衛門
同　村上勘兵衛
同　永田調兵衛

駿河静岡　本屋市藏
遠江濱松　伊勢屋太右衛門
伊勢津　山形屋傳右衛門
同　篠田伊十郎
同　山田　山岸與三兵衛
同　松坂　本屋嘉助
同　東名　糀屋傳四郎
美濃大垣　本屋利兵衛
近江大津　本屋宗次郎
三河岡崎　加藤利兵衛
信濃善光寺　小椙屋喜太郎
甲斐府中　内藤傳右衛門
越前福井　岡崎佐喜助
同　二文字屋安兵衛

同　石田忠兵衛
同　丁子屋源次郎
同　北村四郎兵衛
尾張名古屋　永樂屋東四郎
同　菱屋藤兵衛
同　菱屋平兵衛
同　萬屋東平
同　美濃屋伊六
同　美濃屋文次郎
同　文教堂保兵衛
同　美濃屋代助
同　永樂屋正兵衛
伯耆倉吉　山本屋弥一郎

同　敦賀本郷善七
加賀金沢　近岡屋太兵衛
佐渡羽茂　山本屋與八郎
紀伊日高　紀小竹屋佐兵衛
同　菱屋藤次郎
同若山　坂本屋大次郎
大和奈良　油屋儀八
同　後藤輯
播广姫路　中沢治兵衛
同　灰屋輔二
同　灰屋長平
同龍野　灰屋庄八
同　平井六郎兵衛

備前岡山　勢能屋　源　米
備中倉敷　林　源十郎
同　井原　荻田　元次郎
同　高梁　加島屋　保之助
同　玉島　大村屋　文藏
備後福山　笹屋　喜兵衛
同尾之道　林　藤太郎
安藝廣島　田邊屋　眞六
同　井筒屋　勝次郎
周防山口　山城屋　彦八
同　徳山　淺田屋　孫兵衛
同　萬福屋　要藏
長門下之関　書籍會社

播广国岡　庄司　伊平治
但馬豊岡　由利　安助
同　出石　蘆田　歸一
阿波徳島　大滿屋　武兵衛
同　紀伊國屋　三右衛門
讃岐金刀比羅　柏屋　仲助
同　寶屋　小七郎
伊豫大洲　名田屋　元吉
薩广鹿兒島　青木　叢助
和泉堺　北村　佐平
同　鈴木　久三郎
大坂安土町　書林　商社
同本町　書籍會社

24560

明治七年五月官許
同　月發兌

發行書肆

大阪心齋橋通北久太郎町

積玉圖河内屋

柳原喜兵衛

藤通家藏版

国立国語研究所
1001169364